
ハヤテのごとく！～バレンタインデーの懲りない人たち～

dandy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！ バレンタインデーの懲りない人たち

【Nコード】

N8465J

【作者名】

dandy

【あらすじ】

たった1日に想いを馳せる1話完結型の話です。

ヒナギクの場合（前書き）

…なんなんでしょうね？これは？想像妄想100%ストーリーの始まりです。てか連載小説にする必要があったのだろうか…。まず1人目はこの人です。

ヒナギクの場合

それは…数年前…

「ヒナギク」

「…美希？どうしたの？」

私はその日塾に来ていた。同じ教室で勉強していた友達的美希に帰り際に声をかけられた。

「今日はその…バ、バ、バレンタインデーだな…」

「そうね」

「ヒナギクは誰かに渡したりするの？」

「私？うーん…。一応お父さんにあげようかなって 美希は誰かにあげるの？私と同じでお父さんに？」

「いや…お父さんは今日は帰らない。仕事で出張だから…。それより…」

「ん？」

その時美希は恥ずかしがりながらなにかを渡したそうだった…。だけれど私はなにかわからず…。

「どうしたの…美希？」

「いや…その…」

教室で二人向かい合っていると他の教室から女の子が2、3人入ってきた。そして私を見るやすぐ近づいてきた。そして…。

「桂ちゃん！はい！これ！チョコレートあげるよ！」

「私も！」

「ええっ！？」

いきなり、しかも女の子からチョコレートを差し出され私はちょっと戸惑った。

「え？なんで私に？男の子にあげるんじゃない？」

「だって桂ちゃん、すごくかっこいいから……」

「私もいつも憧れて……」

「とにかく受け取って！」

「あ、うん……ありがとう……」

私は同級生からチョコレートをもらったがいまいち変な感じだった。その様子を美希がじっと見ていたのを私が気になった。そこで私は笑いながら美希に話しかけた。

「なんか妙ね。女の子から私がチョコもらうなんて……」

「妙……？嬉しくはないのか？」

「まあ嬉しいことは嬉しいけど……」

「そっか……。じゃあ私は迎えが来る頃だから……」

そう言うと美希はカバンを持って外に駆け出していつてしまった……。私は美希がなにをしようとしていたのかその時はまだわからなかった……。

数年後…。高校生になった私は相変わらず毎年バレンタインデーにはチョコレートをもらっていた。そして…。

「じゃあ私からも…」

「えっ!？」

「一生懸命食べてね」

美希からもチョコレートをもらってしまった…。机の上に山積みにしたチョコレート…。一体私はいつになったら男の子にチョコレートをあげるようになるのだろうか…。

ヒナギクの場合（後書き）

「友チヨコ」をもらったらこうなるのだろうか…という妄想です。
大丈夫！頭はすでに溶けてますから！！チヨコが溶けるのと脳みそ
が溶けるのと掛けてます。…どーでもいい。あと何人が続きます。

クラウドの場合（前書き）

バレンタインデーっていつからあるんだろーか…。間違いなく60
近いオッサンはあまり意識しないでしょうけど…。まあそこはナア
ナアでいきます。

クラウドの場合

これはまだ私が屋敷で存在感を放っていた頃…

「クラウドさん」

「おお。マリアよ。どうしたんだ？」

屋敷の廊下で三千院家当主帝様に育てられているマリアに声をかけられた。

「今日はバレンタインデーですからクラウドさんにもチョコレートを作りました」

「マリアが？」

「はい！食べてみてください」

マリアに渡された小さな箱をあけるとそこにはハート型のチョコレートがあつたのだ。私はすぐにチョコレートを一口食べた。味はもちろん…

「うん！うまいな。なかなかよくできている」

「本当ですか！？良かった…」

その時のマリアの笑顔がとても印象的だった…。

そして現在…。

「マリアよ」

「なんです？クラウドさん」

「お嬢さまが学校を休んだようだが…一体綾崎ハヤテはなにをしているのだ！！これは責任を追及し」

「まあまあクラウドさん。今日はほら…2月14日なんですよ？」
「2月14日…？」

私はその時思い出した。バレンタインデーというものを。久しく忘れていたその言葉。私の胸は踊るようだった。

（そ、そうか…！お嬢さまはもしか私のために…！）

気になった私は自然と足がお嬢さまのいる部屋へと向かった。『立ち入り禁止』と書かれた紙。それを知りながら私は扉をちよっと開き中をそつと覗き見た。

「くそう…！ダメだ！納得がいかん…！！こんなじゃ私の愛は伝わらん…！」

（なんと…！お嬢さま…！）

私は目頭が熱くなった。泣きそうになるのをグッとこらえる。しかし私は次の言葉に耳を疑った。

「ハヤテへの想いをこのチョコレートに…！」

ハヤテへの想い…？そう…。お嬢さまは私にバレンタインデーのチョコレートを作っただけでなく、無駄に期待した私は肩を落としてぼとぼと屋敷の奥へと消えていった。その存在感と共に…。

クラウドの場合（後書き）

期待とは裏切られるものである。…なんかいいこと言っただけ裏切られたときのショックも大きいという…ね。やかましいわ！！

薫先生の場合（前書き）

99%もらえないとわかつてはいても残りの1%に希望を持っていた。つまり人間100歳まで生きりゃ1回くらいは本命をもらえるという…苦しい言い訳。

薫先生の場合

「は？今日が何の日かって？なによいきなり。給料日じゃあるまいし…」

俺はいつものように無理やり飲みに連れていかれたあいつに聞いてみた。もちろんすでもう酔っている。

「私はね、給料日とあと何日かしが大事な日は覚えていないのよ」

「…今日はあれだ。バレンタインデーだよな…」

「バレンタインデー？」

「…お、お前は誰かにチョコレートあげたりしたのか？」

さりげなく、いや、結構堂々と彼氏の有無を聞いてみた。まあこんな所で飲んでる時点でいるわけがないだろうが…

「あげるわけないじゃない。何？あんたは一個ももらってないから欲しいわけ？」

「な、なんで一個ももらってないって決めつけてるんだよ！」

「じゃあ貰ったの？」

「…いや、ない…」

ないことはないのだが勝手に0と決めつけられるのは癪だった。無駄な意地だ。

「まあ昔からオタなあんたがバレンタインデーにチョコレートなんかもらえるわけないわよね」

「…お前はどうかんだよ。好きな男とかいねーのかよ」

「いるわけないじゃない！私が好きなのはお酒とお酒を飲んでる自

分だけよ！！…さつきからあんたおかしいんじゃない？」

「な、なんだと！？」

たしかに酔っているとはいえ自分でも変だと思ったが…。

「さて…そろそろ帰るわよ。お勘定よろしく」

「言われなくともわかってるっつーの！！」

俺はいつものように二人分の勘定を払い店を出た。

「じゃあな。気をつけて帰れよ」

「…ちよつと待った」

俺は足を止め振り返る。なにかと思えば雪路が俺の右手になにかを握らせた。

「…なんだ、これ？」

「あめ玉よ」

「あめ玉…？」

「バレンタインデーにチョコの1つももらえないんじゃないかわいそうだから私がそれあげるわよ。んじゃ」

そう言つて雪路は家…といつても白皇の宿直室へと歩き出した。俺はじつとあめ玉を見つめていた。チョコレートだろうがなんだろうが関係ない。あいつからバレンタインになにかをもらえただけで俺は嬉しかったのだから…

「…って、これ！今の飲み屋で配つてたあめ玉じゃねーか！！」

薫先生の場合（後書き）

まあ何もあげるのはチヨコレートじゃなくても構わないと2010年2月13日朝放送の主に宇宙ガエルが活躍するアニメでも言っていましたから。つまり…金？

サキの場合（前書き）

熟年夫婦は2パターンありますよね。年をとることに二人の仲が深まる人たちと年をとることに一人生活するのが苦になるパターン。私はどれにもあてはまらない。なぜなら仲良くなるまで一緒にいないから。

サキの場合

若と出会ってから最初のバレンタインデー…。私は手作りチョココレートをプレゼントしたんです。

「若 はい。どうぞ」

「…なんだ、これ？」

「なにつて…チョココレートに決まってるじゃないですか。今日はほら…バレンタインデーなんですよ？」

「…ああ。2、3日前からコソコソ作ってたアレか」

…どうやら内緒で作っていたチョココレート、若にはバレていたみたいで…

「ご丁寧にラッピングまで…。どうせ開けるんだからなくてもいいのに」

「み、見た目は結構大事なんです！！とりあえず…食べてみてくださいさいよ」

「ん。ああ」

私は若がチョココレートを食べるのをドキドキしながら見ていた。きつとうまくいったはずだと信じて。でも…

「うわっ！？お前これ味見とかしたのか！？」

「してるわけじゃないですか！！せっかくハート型になったのに食べたら欠けちゃうじゃ…」

「形の問題じゃねーよ！！これ塩だろ！！どんだけベタな間違いしてるんだお前は！！」

「す、すみません！！…すぐに片付け」

私は顔を真っ赤にしながらチョコレートを片付けようと思いました。
けど若が右手で私を制し、こう言っただけです。

「…だからって食べなくてはねーよ。死ぬわけじゃないんだしよ」
「けど…」

「今度は間違えるんじゃないぞ。俺だから良かったものの…好きな
奴にこんなチョコレート渡したらマジで嫌われちゃうぞ」

そう言っただけで私の失敗作のチョコレートを食べ続けてくれました。
そんな若にいつか「おいしい」と言ってもらえるよう私は毎年チョコ
レートを作りに続けています。私にとってバレンタインデーと
は自分を成長させてくれる1日なんです。

サキの場合（後書き）

なんか次第にコンセプトがわからなくなってきました。熟年夫婦って…おい！次はちゃんとやります。

泉の場合（前書き）

みなさん。思い出してみてください。一番最初に好きになったのは大抵お父さんかお母さん。だから両親はいつまでも大切に…え？うるさい？失礼…。

泉の場合

それは…私が初めてお父さん以外の人にバレンタインデーのチョコレートを作っていた時…

「泉」

「なあに？お父さん」

「虎鉄から聞いたんだが…チョコレートをたくさん作っているというのは本当か？」

「うん！」

キッチンにはたくさんのチョコレート型の山。型もたくさん用意していたの。

「そうか。お父さんもこんなにたくさん泉からチョコレートもらえてうれしいな」

「ほえ？…お父さんのもあるけど、他の人にあげるんだよ」

「な、なあにい！？」

いきなりお父さんの顔は鬼の形相になっちゃって…

「まさか…好きな男にか！？」

「ち、違うけど…。前に話した…男の子に…」

「い、泉がキスした男にか！？」

「うん お父さんがそんなお礼しちゃダメって言うから…チョコレートを作っただげるの」

「そ、そいつはどこにいるんだ！！？」

「うーんと…わからないけど商店街にもいたし、きっとこの近くに住んでると思うんだ」

私はワクワクしながらチョコレートを作り続け…

2月14日…

「それじゃあ虎鉄くん。行ってくるよ」

「行くって…例の男の子を探しにか？」

「きつとまた商店街あたりで会えると思うから…」

「そう言ってもう何日も経つじゃないか」

「もー！きつと今日は会えるよぉ！！」

私は胸を踊らせ商店街へ向かった。そしたら…

「出てこぉおあい！！！！！」

「えっ！？」

「泉からチョコレートをもらうのは私だけだぁー！！」

日本刀片手にお父さんが私にチョコレートを渡させまいと暴れていた…。その年以来私は他の男の子の話をお父さんの前ではしなくな

つ
たの
…

「おしおめい…!」

泉の場合（後書き）

授業参観にこないでとか運動会にこないでとか言わないの。いつかはあなたを応援してくれる人なんて誰もいなくなってしまうのだから…。悲しい。

千桜の場合（前書き）

なにもバレンタインデーに興味がないのは男性だけではない。たぶん。女の子がみんな光り物好きとは限らないということです。私は光り物好きですよ。アジとかコハダとか…あれ？

千桜の場合

バレンタインデー。そんなもの私には無縁だ。街ではバレンタインにあやかりチョココレートの特設コーナーがたくさんあるのをただ横目で眺めるだけだ。

（…こんなに高いチョコ買ってどうするつもりだ？しかも義理だろ？そうか…。見栄か）

冷めた感情で私はチョココレートを選ぶ女を見ていた。まあ私なんかには縁のない話だが…。

（しかし一回チョココレートをバラバラにして自分でまた作り直すだなんて…。なにを考えているんだ？）

手作りチョココレートには味の代わりに愛が詰まっているというのが私にはよくわからん。愛があるかどうかなんて所詮はわからない。なら手っ取り早く判断するのは味だろう。

（ま…白皇は金持ちばかりが通う学校だしスーパーでチョココレート買うなんてことはしないだろうな…）

そして私はそのスーパーですら素通りして家に帰る。今日は生徒会の仕事もない。やはりバレンタインデーだからなのか？

（いや…まさかヒナギクに限って放課後誰かにチョココレートを渡すなんてないだろうし…）

私にとってはうれしい限りだ。こんな日には家に帰ってひたすらゲ

ームをするに限る。浮き世でなにが起きようと私には一切関係がないのだから。

千桜の場合（後書き）

要はね、女の子も「りぼん」とかそーいう雑誌じゃなくて「ジャンプ」も読むってことよ。…なんか違うな。とりあえずみんながみんな同じものを好きになるとは限らない。

ハヤテの場合（前書き）

どうしてバレンタインデーなんてあるんだろう……。その答えをまだ見つけられません。

ハヤテの場合

数年前のバレンタインデー…

「よし！できた！」

僕はひたすらにチョコレートを作っていた。誰にあげるわけでもない。機械的に大量生産していたんだ。

「いやー。さすが綾崎くん。とてもアルバイトとは思えないよ。高校生でこれだけできるなんて信じられないなあ」

「あはは…。どうも」

店長にほめられた僕だが内心はヒヤヒヤしていた。なぜなら本当はまだ中学生。学費を稼ぐために仕方なく年齢を偽っている。バレたら間違いなくクビだろう。けどこんなになに仕事をもらえるバイトなんてそうあるもんじゃない。辞めさせられるわけにはいかないんだ！そう思いながらひたすらにチョコレートを作り続けた…

そして…

「私にチョコを作ってプレゼントしてくれ」

「は!？」

なんの因果か僕は働いているお屋敷のお嬢さまからバレンタインデーのチョコを作るよう言われた。チョコを作るなんてことは造作もないことなんですけど…僕がバレンタインデーにチョコを作らなくなるのは一体いつになるのでしょうか…

ハヤテの場合（後書き）

バレンタインデーは寒くて動きたくない2月をちよつとでも好きになるように仕組まれた罠なんだろうな。適当。

マリアの場合（前書き）

めちやくちゃになった部屋を片付けるのはいつも…

マリアの場合

「ではマリアさん。おやすみなさい」

「え、ええ…。おやすみなさい…」

まさかハヤテ君からバレンタインのチョコレートを買ったなんて…。
はあ…。こんなところにも風邪を引いてしまいますしお屋敷に
戻りますか…。それに私にはまだやる事が…。

「これ…どうしましょう…」

夢中になってたとはいえ私が作ってしまったチョコレート mountain 山…。
いまさらハヤテ君に…。っていうのもなんだか気が引けてしま
いますし…。でも捨てるのももったいない…。

「困りましたね…。あ、そうですね」

次の日の休憩時間…

「さて…ティータイムは紅茶とチョコレートといきますか」

冷蔵しておいた不死鳥型のチョコレート。…うん　なかなかおいしいじゃないですか

二日後…

「…今日は…昼食を抜きましたから食べても大丈夫ですよね…」

どうしましょう…。心なしか体が重く…。いえいえ。気のせいです。冬ですし厚着しているのが原因でしょう…。

三日後…

「…なぜこんなにたくさん作ってしまったのかしら…」

だんだんチョコレートと向かい合うのが鬱になってきましたわ…。しかも自分で作ったチョコレート…。どうしてバレンタインデーが終わってから苦勞しなければならぬのかしら…。

マリアの場合（後書き）

「作りすぎたからあなたにあげる」そんなお隣さんにおすそわけみたいなカンジでいいからなにかをもらいたいです。

ナギの場合（前書き）

トリはやっぱりお嬢さま。9話書きましたがまあ出来はいいの悪いのと差がありますなあ…。最後までお付き合いいただきありがとうございます。最後に一言！ハッピーバレンタイン！！…やかましい？

ナギの場合

それはまだ私が海外で生活していた頃の話：

「ナギ」

「ん？どうしたのだマリア」

「お電話ですよ」

部屋でロープレをしていた私をマリアが呼んでいた。片手には受話器が握られていた。

「誰からだ？」

「日本にいる帝おじいさまからです」

「切れ」

「…そんなこと言わないで…でてください」

「仕方ないなあ…」

私は渋々受話器を取る。

『おお！ナギか。元気か』

「なんだクソジジイ。私の健康の心配より自分の身を心配したらどうなのだ？どうせもう先は長くないのだからな」

『つれないのお。ところでナギよ。近々日本に帰る予定はないのか？』

「ない。寒いし暖くなるまでは帰らん」

『もうすぐバレンタインデーじゃろが。チョコレートの1つや2つ

…』

「誰がお前なんぞにチョコレートをあげるかあ…！」

ブチッ！

私は速攻で電話を切り戸惑うマリアに受話器を渡した。

「おじいさまは何と？」

「くだらん用事だ」

「でもそれではすねてしまわれるので私がチョコレートを作って日本に送っておきますね」

「ああ。悪いな」

私はバレンタインデーになどなんの興味も示さず生きてきた…

しかし…

「なぜだ…。うまくいかない。チョコレートを作るのは想像以上に難しいのだな…」

私も大好きな人にバレンタインデーのチョコレートを作る女の子になっ
ていた。しかしいかにせん料理が下手な私はマリアのようにうまくい
かない。

「むむ…！やめだやめだ！！こんなもんで愛が伝わるものか！！」

こんなことになるなら前々からちゃんと料理を学んでおけば良かった！…軽く後悔している。みている！来年こそはちゃんとチョコレートを作ってプレゼントしてやるのだ！ハヤテエ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8465j/>

ハヤテのごとく！～バレンタインデーの懲りない人たち～

2010年10月9日19時20分発行